学校教育目標
夢・命・絆
夢 に向かっていく生徒
命 を大切にする生徒
絆 を互いに深め合う生徒

須和田が丘

令和４年度
学校だより　Ｎｏ．９
令和４年５月１０日

市川市立第二中学校
校 長　　石田 清彦

ホームページ　http://www.dai2-tyu.ichikawa-school.ed.jp/

定期テストから単元（学習内容のまとまり）テストへ１

第二中学校では、個別最適な学びと協働的な学びの実現を図るため、今年度より定期で行っていた中間・期末テストを廃止し、単元テストへ移行する方向としています。

単元テストとは、各教科の学習内容のまとまり（単元）ごとに行うテストであり、授業の進捗に応じて不定期に行うものです。

そこで、「定期テストから単元テストへの移行」の考え方について、お知らせいたします。内容が長くなるため、「（１）単元テストへの移行は何のため？」をNo.9で、「（２）単元テストへ移行すると何が変わるの？」「（３）単元テストは具体的にどのように行うの？」をNo.10で記載させていただきます。

（１）定期テストから単元テストへの移行は何のため？

定期テストから単元テストへの移行は、これからの時代に必要な資質・能力を適切に評価し、その育成を着実に図るとともに、主体的に学ぶ力を高め、学力の向上を図るために行うものです。

これからの時代は「予測困難な時代」と言われ、社会全体が答えのない問いに立ち向かっていかなくてはなりません。

そのような中にあって、これからの時代を生きる子供たちには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させた上で、思考力・判断力・表現力や、自ら学習に向かう態度等を育成することが重要となっています。

一方、これまでの学校教育は、国の経済発展を支えるために、「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」人材の育成が社会の要請として求められ、学習においては「正解（知識）の暗記」の比重が大きかったために、「自ら課題を見つけ、それを解決する力」の育成や、自ら考え抜く学びが十分なされていなかったとの指摘があります。

定期テストは、高度経済成長期のような「正解（知識）の暗記」に大きな比重があった学力観の時代では、学力の定着を図るうえで有効な方法であったと思いますが、これからの時代に求められる学力観（知識や技能の定着を前提とした上で、思考力や判断力、表現力、学びへ向かう力などの育成を目指す学力観）のもとでは、定期テストで身につけさせたい力を十分に見取っていくことは難しく、十分な対応ができなくなってきているのです。

確かに、中間・期末といった、前期２回、後期２回だけのテストで成績の大半が固められれば、生徒にとってもその期間だけ集中して頑張れば済むことであり、テスト前に出題されそうな部分を一夜漬けで頭にたたき込む勉強法も有効かもしれません。しかし、そのような勉強法が、「各教科で学んだことを生かして課題を解決する」といった、これからの時代に求められる学力の育成に、本当に結び付くのでしょうか。

本来テストとは、生徒が「自分の中で学力が定着しているかどうか」を確かめるためのものであり、その方法は「定期」である必要はないのです。

定期テストから単元テストへの移行というと、何か根本から大きく変わるような印象があるかも知れませんが、評価の本質が変わるわけではなく、「長期で区切る定期試験よりも、評価の頻度を多くして、一人一人の学習状況や理解度を的確に把握し、学力の定着を確実に図る」ことや、「思考力・判断力・表現力や、自ら学習に向かう力を適切に評価できるようにする」ものであり、テストの頻度と質が変わる（高まる）ものとお考えいただければと思います。

そこで次号では、「単元テストに移行すると何がどのように変わるのか」について、お知らせいたします。

なお、単元テストは短期的な学習成果を確認するものであることから、これまで通り「実力テスト」

裏面に続きます

を活用して、より広い範囲で学力が継続して身についているかどうかを確かめる機会を設け、生徒一人一人の学習改善につなげてまいりたいと考えています。

今年度の実力テストは、昨年度（３年生４回、１・２年生１回）より回数を増やし、３年生は６，９，10，11，12 月の５回、２年生は９，12，３月の３回、１年生は９，３月の２回実施し、充実を図ってまいります。